

トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

東京都新宿区西新宿2丁目1番1号
 新宿三井ビル37F(〒160)
 TEL. (03) 344-1701~3

Jan. 1982 No.16

研究計画の公募締切る

—研究コンクール、前回は上回る応募数か？

トヨタ財団では昨年10月15日以来、“身近な環境をみつめよう”というテーマの第2回研究コンクールを実施し、その研究計画を公募しておりましたが、この1月15日で公募期間を終了、事務局では今その受付と整理に多忙を極めております。15日消印有効のため最終の応募数は未定ですが、前回の応募件数128件を上回るようになるのではないかと思います。

公募開始以来、応募書類請求のハガキは400通を越えました。関係雑誌や地方紙、地方の放送局なども公募案内に関してご尽力いただき、このコンクールが広く全国の皆様に伝達されましたことを感謝しております。

財団では今月末から来月にかけて20件程度の研究奨励賞候補を選考し、これらのチームには3月末から9月末にかけて予備的な研究を進めていただくと共に、10月以降約2ヶ年にわたって実施する研究活動のための実施計画を策定していただくこととなります。その結果10数件の研究奨励賞が選出されるわけですが、これまで世界のどこにもなかったようなユニークな研究活動が誕生することを期待しております。

第14回財団懇話会

「研究助成のあり方」をテーマに意見交換

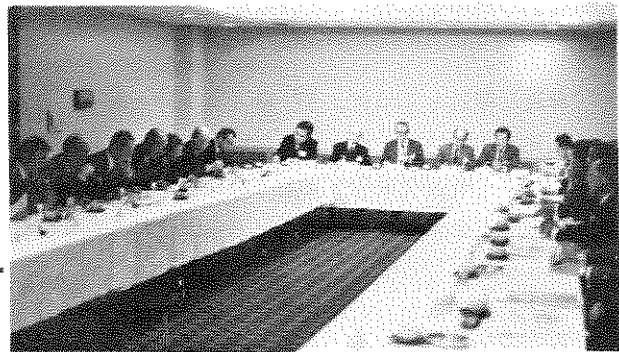
財団懇話会という耳馴れない組織がある。これは助成活動を主目的としたいわゆる「民間助成財団」で組織する任意団体であり、昭和49年12月に第1回の懇話会をもって以来、毎年夏と冬に会をもち、相互の情報交流を計り、財団関係者の親交を深めている。

昨年12月8日にその第14回の懇話会が東京青山のダイヤモンドホールでもたれた。当日新たに加入した藤原科学財団を含め、会員団体は26となった。当日はこの全団体、人数にして43人の参加があり、「研究助成のあり方」について意見を交換した。この懇話会は毎回順番にメンバー団体が幹事役となり準備を進めている。

第1回研究コンクール 研究奨励賞チームの中間研究報告会を開催

2年前の10月にスタートした第1回研究コンクールは昨年秋に研究奨励賞チーム14件が選出され、各チームはそれぞれに独創性に富む研究活動を続けております。昨年11月14、15日の2日間にわたって1年経過後の研究報告会を東京に於てもちましたが、各チームとも非常な熱意とご努力のもとに“身近な環境”の新しい視点に基づく実態把握に挑戦しておられ、興味深く聴かせていただくと共に、頭の下る思いがいたしました。

報告会の後には第1回、第2回の選考委員の先生方にお集まりいただき、各報告についてのご感想を話し合っていたいただき、その後に今後の進め方について懇談をいたしました。事務局にとっても大変有意義な示唆に富むご意見が出されました。中間報告会の様子や各委員のご発言などは「研究コンクール資料③」としてとりまとめるべく、現在、事務局で編集中です。(関連記事P6参照)



今回の当番幹事は日本心臓財団。事前に各財団に対してアンケート調査を行うなど、周到な準備のもとに会が進められた。

開会挨拶に引続き3つの財団から話題提供があり、続いてアンケートの集計報告が行われた。その後鹿島学術振興財団常務理事の原現吉氏の司会により、自由討論が進められ、各財団から公募の方法や選考の進め方について現状や問題点が語られた。

なお、今回の報告内容は(財)公益法人協会の機関誌「公益法人」2月号に特集記事としてとりまとめられる予定となっている。(写真は当日の懇話会の情景)



助成財団の広報活動を考える

トヨタ財団 事務局長 山口日出夫

1. 助成財団はどれくらい知られているだろう

試みにトヨタ財団はどんな仕事をしていると思いますかという質問を發すると資金があつて何か文化的な活動をという答があつたり、なかには何かクルマに関係した仕事をという答もある。財団にたいしてもっている平均的なイメージは大体こういうところである。これは財団法人といつても千差万別であり、またわが国における財団活動は比較的歴史も新しくそのスケールも大きくないので致し方ないところである。

一般の人の認識はそうだとすも、我々が助成すべき対象の研究者の方々には、かなり、財団の活動は知れていると考えて良いだろう。トヨタ財団の場合、助成決定件数の10倍も申込があるのであるから、まずまずと言つてよい。しかしそれでも「私のような若い者の研究が助成対象に選ばれるとは…」といった感想をお聞きすると当財団が狙いの一つとしている次代を担う若い研究者を育てようという考えはうまく伝達されてないのかと反省が先に立つ。

“身近な環境をみつめよう”研究コンクールや“隣人をよく知ろう”プログラムについて、一般の人に説明するとたいへん有益な企画だと大きな反応が必ずある。しかしこのことを裏返して考えるとその人達はそれまでに何も知らなかったのだということになる。

一般的に考えると、かなりよい広報の素材があつてもなかなか知られていない。もっと知って貰はなくてはという実感である。

2. 黒衣になぜ広報が必要か

財団活動をすゝめるにあつての心構えとして、財団は黒衣に徹すべきであるとか、財団みづからが舞台で脚光を浴びるようなことがあつてはならないとされている。そう言つていながら何を今更広報活動かといった反論もありそうである。それに財団は公益活動をやっているのに何で宣伝がましいことまでやるのかといった感じがないでもない。或はそこまで厳しく考えなくても広報活動に積極的意義を認めてない面がある。

しかしどの財団でも、高い理念を掲げて財団活動を推進している。そのところが分つていただけないと困る

のである。また各財団ともかなり内容の濃い社会性の高い助成活動をおこなっている。それを必要とするすべての人が有効に活用してもらえないと、宝のもち腐れである。この状態をすこしでも改善するためにも財団側としては効率のよい広報活動をしなくてはならぬ。財団の広報活動は、財団みづからが脚光を浴びるためのものではなく、研究者に脚光を浴びてもらふお手伝いであつたり、或は社会活動に努力している人達の手助けをするということに尽きるのである。

3. 財団活動への期待は大きい

本年度の国内部門での研究助成は、88件2億8千万円であるが、申請は778件28億3千万円であつた。お断りするのが残念な研究も数多い。或は日頃相談をうけるなかに、大変有意義であるが、当財団の扱える範囲でないためお断りするケースも多い。現在第2回目の公募を締切つたところであるが第1回目の“身近な環境をみつめよう”研究コンクールを実施した時のこと、果して応募がどれだけあるだろうかとの事務局の危惧をよそに128件もの応募があつた。まだまだ発掘されるべき研究活動が沢山あるということにならないか。当財団の催す研究報告会などでも、もっと沢山のの人に聞いて貰えればという声も高い。これらのことから察するに民間の助成財団の広報活動はもっと活発に大規模なものになつてよいと思う。

まだ財団活動は一部の人にしか知られてない。もっと多くの人に知つて貰い、財団活動の意義が認められ財団活動が活発におこなわれるとよい。

4. 広報活動をすゝめるにあつて

財団の広報活動は助成を受ける側のためになされるべきである。そうはいつてもいざ実施となるとなかなか困難である。

何といつても財団の規模が小さくないのでマス媒体との接触に難がある。併し規模は小さくても財団の活動そのものは社会の共感を呼ぶものが多い。量はともかく質で勝負できる。日頃、個々の活動を“広報する目”で観察していけば、何とか活路はみだせると思う。量が不足するなら、財団同士がまとまつてという方法もある。

個々の財団のみならず財団全体への理解促進のためにはその方が良くも知れない。いずれにしろわが国の財団活動はもっと知られて良いと思う。そのための努力は欠かせない。助成を必要とする人達のために。



第13回国際植物学会議・植物プランクトンに関するワークショップに出席して

筑波大学生物科学系 助教授 堀 輝 三

筆者ら(堀・原慶明)は当財団の成果発表等助成金を得て、シドニー大学(オーストラリア)で昭和56年8月21日～28日に開催された「第13回国際植物学会議」と、引き続きシドニー郊外のクロスラにあるCSIRO海洋研究所で8月31日～9月2日に開催された「オーストラリア植物プランクトンに関するワークショップ」に出席し、当財団研究助成金にて研究した3年間の成果の一部を四演題にわたって発表した。

●国際植物学会議の概要： 早春のシドニーへ、世界50余国から約3300人、うち日本からは同伴者を含めて約100人が参集し、当国の誇る巨大なオペラハウスでの開会式を皮切りに会議は開始された。発表は、12の専門別セッションにわかれて毎日同時進行し、各セッションは8～16のシンポジウム、特別講演、一般講演、ポスター発表で構成されていた。筆者らはセッション10の海産・淡水産植物学の部門で発表した。原(慶明)は、本邦海域における重要な赤潮生物の一つとして、また世界の多くの研究者によって種々の生物学的研究の材料としても広く使用され、また多くの研究施設にその名で保存されている*Olisthodiscus luteus*という生物が、原記載の生物とは異なる別の生物であるらしいこと、しかも彼らは原記載に一致する真の*O. luteus*を瀬戸内海から分離・研究することに成功したという、非常に興味ある成果を発表した。演題名のおとなしさに較べ、ショッキングな発表内容のため、講演終了後も会場に声なしの状態であった。

筆者は、赤潮生物の一つである*Pyramimonas*の分類同定法に関して、現在最も信頼のおかれている方法に対する問題点を指摘し、より信頼度の高い方法の提案をポスター発表で行った。この発表形式は、発表内容に強い関心のある人達だけがポスターの前に集まって、発表者と1対1で直接討論することになるので、両者に実りある方法である。当会議では、貼り出し期間は4日間で、その中の定められた日の2時間、自分のポスターの前に居て説明することと、発表者の写真を同時に貼ることを義務づけていた。筆者の場合、貼り出し作業に行ったその時から、待ちうけていたオーストラリアの若い2人の研究者と討論が始まり、発表のための補助資料まで取り出して

論議する始末であった。説明当日の2時間はまたたく間に過ぎてしまった。筆者と同じ方向の研究に取り組んで、現在世界で最も活発に研究活動をしている、一人は知己のデンマーク人研究者、もう一人はこの学会で初めて会えることを期待していた西ドイツの研究者と、それぞれ一時間ずつ、筆者の発表と彼等のデータとの討論で時間の大半が過ぎてしまった。

●植物プランクトン・ワークショップの概要： 国際植物学会議の関連集会の一つとして、本会議は時間的な制約と巨大なプログラム数のため、プランクトン学に興味のある研究者相互の情報交換も充分とは言えない面があるので、それを補充したいとの主旨で、CSIRO研究所の主任研究官の妙齢な Jeffrey 博士がコンビーナーとなって、Hasle教授(ノルウェー)、Round教授(イギリス)、Narris教授(南ア連邦)の3氏がmain discussantsとして計画され開催された。講演34題を含め、ポスター発表、実技デモンストレーション、オープンディスカッションなどが毎日朝9時から夜6時半頃まで、ティータイムを何回かはさみながら、50名の限定参加者によって一つの部屋で行われた。原および筆者も、本財団研究助成金による本邦赤潮に関する成果を紹介発表した。寛いだ、インフォーマルな雰囲気での討論を重視したため、夜7時頃から近くの街の決められたレストランに任意に集まって、夜の食事をしながら11時近くまでワイン、ビールを飲みながらの自由討論が毎夜行われた。筆者らの発表・提案に対して、早速 Jeffrey 博士から、彼女の研究グループが所有する株の分類同定を依頼されることになった。また他の研究者からは、株の供給、交換を申し込まれたりいろいろな反応があった。日本では未だ赤潮を形成したとの報告のない生物について、私達が潜在種と予想し、詳しく研究し今回発表した生物が、オーストラリアにおいて見事に？赤潮を形成していることを知って帰国した直後、九州から同定依頼のため送られてきた赤潮サンプルが、まさしく同じ仲間であったことは、改めて地道な研究の重要性を再認識する機会を与えてくれた。

CSIRO海洋研究所にて。右より2人目筆者。





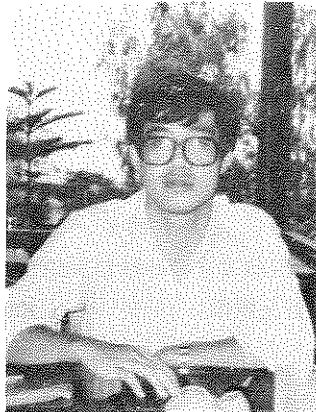
東南アジア便り

国際部門・プログラムオフィサー

岩本一恵

○タイ：初の包括的タイ経済学書の刊行

本年9月、チェンマイ大学経済学科の助教授2人が共同編集者となって、「タイ経済：過去を振り返り未来を展望する」(ルーチャイ・チュラサイ、ミンサン・サンチカーン共編、チェンマイ書籍センター社刊)が刊行され、チェンマイ大学の教授陣の祝福を受けた。本書は幾つかの点で新しい時代の初まりを象徴している。

プロジェクト・リーダー
ルーチャイ・チュラサイ博士

第1に、タイ人経済学者の手になる包括的なタイ経済学書は、これが初めてであるという点である。今までにあった経済学書は、外国人経済学者の手になる包括的なタイ経済学書かまたは、タイ人経済学者による特定分野を扱った専門的経済学書かであった。

第2に、首都にある大学ではなく地方の一大学がこれを行ったという点である。当の編集者ルーチャイ博士自身、数年前に私に語ったことがある。「地方大学はあらゆる点で恵まれていない。教師達は首都の大学の様子が気になり、機会あらば首都に移ろうとしている。その結果、教師は定着しないし、授業に身が入らない、したがって教育水準も上らない。その上、研究の機会が少ないため、教師の研究能力を向上させることもなかなか難しい。だから首都の大学との共同研究などは、我々初級研究者にとっては学ぶことが多いだろう。しかし共同研究で訓練を経た後は、地方大学の教師達自身で研究ができるように自立する努力が必要である。」

第3に、タイ経済を包括する本書は、タイの3つの経済学派の考え方全てを網羅しているという点である。タイには、ポリティカル・エコノミスト、クラシカル・エコノミスト、ネオ・クラシカル・エコノミストの3派がある。ポリティカル・エコノミストの特徴は構造改革を

主張することで、ネオ・クラシカル・エコノミストの特徴は、構造には手をつけずに部分的な改善を主張することである。前者に属する経済学者は主としてチュラロンコン大学に多く、後者は銀行やタマサート大学に多いと言われている。チェンマイ大学の経済学者は、米国の大学で学位を取得したケースが多いため、理論的にはネオ・クラシカル・エコノミストであるが、タイの他学派の学者から学ぶ機会も多かったため、1つの派に片寄らない付き合いを行って来た。本書の実現は、したがって、地方大学としての立場を逆手に取ったルーチャイ博士の名コーディネート振りに負うところが大きい。

当財団は、1979年にチュラロンコン大学と他大学との共同研究に助成を行った。真面目に研究に取り組んだチェンマイ大学チームは、経験を得、研究能力に格段の向上を見た。その次のステップとして、首都の大学からは独立したプロジェクトに取組むということで、かねてよりその必要性が痛切に感じられていた包括的タイ経済学書の刊行を計画した。前述した3つの学派から第一線で活躍中の専門家を招待して、シンポジウム—編集—刊行という形で進めることにした。これに対して当財団理事会は、シンポジウムの費用および刊行費の一部分への助成を本年3月に決定したのである。

シンポジウムは5月にチェンマイで開催され、19人の著名なタイ経済学者の論文が発表された。参加者には、チャティップ、スパチャイ、レー、メティー、ウィーラポン、ディレック、ワリン、プリーチャ氏等が含まれている。これら各経済学派の人々が一堂に会し、数日間の共同生活を行ったことは、参加者全員にとって互いの意思疎通という点でも意義が大きかったことは勿論である。なお、本書は地方開発に重点が置かれているため、大学の経済学科学学生、教師、ビジネスマン、公務員のための好書となる。

○マレーシア：人形劇団「マレーシアの星」

「ジャックと豆の木」「3匹の山羊」「大きなかぶ」はどの国の子供達にも気に入られると見える。間もなく発足1周年を迎えるクアラルンプール児童図書館人形劇団の十八番もこの3つの童話とマレーシア民話「魔法のかご」である。

このチームの中核は、児童図書館司書のアリマ・サラム氏とフリーの画家兼絵本作家のモハド・ユスフ・イ



「ピンタン・マレーシア」の顔ぶれ（右から2人目がユスフ氏、3人目がアリマ氏、左端は林専務理事）

スマイル氏である。アリマさんは、当財団の5周年記念特別プログラムとして行ったワークショップ「アジアの子供劇場」に、マレーシア・チームの代表として来日した。当時マレーシアにはヴォランティア活動として児童のための人形劇上演を行っているチームは見当らなかったため、これからは是非そうした活動を行いたいと考えかつヒントを求めていたアリマさん等を、招待したわけである。アリマさんは、日本の「おはなしキャラバン」チーム、東南アジアから来たタイの「子供の世界」チームから非常に刺激と示唆を得て帰国した。

帰国後1年間は適当な相棒が見つからず、人形劇団結成案は陽の目を見なかった。一方、ユスフ氏は、もっぱら象だけを描き続けてきた画家で、生計は絵本を書くことと絵を教えることで立ててきた。その他にヴォランティアとして演劇活動に参加し、また、アリマさんと出会う前には、「シヌリ」(おおむちゃんという意味)という語り聞かせ(ストーリー・テリング)チームに参加していた。2人の出会いによって最も好ましい組み合わせができて、人形劇チームが発足することになった。2人の他に、児童図書館の職員、他のヴォランティアが加わり、合計6人でチームが構成された。

彼等は、ワークショップ「アジアの子供劇場」の8ミ児童図書館絵画教室常連の作品



リフィルムを何度も見て検討し、また「おはなしキャラバン」の歴史、フィルムを資料にして議論を重ね、最も簡単な人形劇から実験的上演を開始して、マレーシアの子供達の反応を研究した。その結果、1年間に驚異的な成長を遂げ、既に40回の上演を、小学校、図書館、他で行った。マレーシアの子供の日は勿論、他の祝祭日にも政府関係官庁、地方自治体、企業等に招かれて上演を行い、注目を集めるようになった。

このグループの活動の特徴は、無料で上演すること、手作りの舞台、手作りの人形を尊ぶこと、つまり子供を刺激するのは人形の精巧さや舞台装置ではなくあくまでも話の内容であるという線を貫くこと、子供の反応に応じてストーリーに新しいことを付け加えるなどの工夫をいつも心がけること、といえよう。主として英国の婦人達を中心に結成されているシナ・ムティアラという人形劇団との相違がこれらの諸点にはっきり出ている。

チームの来年の目標は、農村地域での上演、レポーターにマレーシアのお話をもう少し加えること、子供達の読書促進にできる限り協力すること、伝統音楽・楽器を人形劇の上演に使用すること、他の東南アジア諸国のヴォランティア・グループとの連絡を密にすること、である。

当財団の林雄二郎専務理事と私は、新しくできた大きな団地の真中に建てられたばかりの児童図書館分館を訪ね、このチームの「ジャックと豆の木」変じて「アワンと豆の木」の上演を見学したが、子供達の活発な反応が印象的であった。クアラルンプール児童図書館人形劇団では覚えにくいので、ニック・ネームをつけてはと提案し、林専務が「ピンタン・マレーシア」(マレーシアの星)という名を候補として出した。これはどうやら採用されそうな雲行きである。

「アワンと豆の木」に熱中する子供達





“身近な環境をみつめよう”研究コンクール 中間報告会を聞いて

昨年11月14、15の両日、東京港区六本木の国際文化会館で研究コンクールの中間研究報告会が開かれた。14日は研究奨励賞銀賞チームのうち、名古屋、坂戸、佐渡、近江八幡の4チームが報告を行い、15日は金賞の白根山、房総、岐阜、沖縄、比企、岩倉の6チームが報告を行った。また15日は報告会の後、第1回、第2回研究コンクール選考委員合同の委員会が行われ、中間報告を聞いての各委員の感想、第2回コンクールに向けての意見などが話し合われた。以下は、選考委員の意見を踏まえて、事務局として感想をまとめたものである。

●コンクールならではの研究体制

今回報告された各チームの共同研究者の構成をみると大学や研究所に所属するいわゆるプロの研究者が全体でもせいぜい2割と、当財団の例年の研究助成と比べてもきわめて少いことが注目される。これは、環境を単なる研究対象として考えるのではなく、そこに暮らす生活者の視点から見なおそうという、このコンクールの主旨をよく反映した形となっている。この一年間の各チームの活動報告を聞いても、中学・高校の先生方や地域住民の方々が積極的に参加している様子を感じられる。

しかし、研究計画の基本的な部分ではまだプロの発想にリードされている感が強く、今後の展開の中では、さらに生活者の立場からの発想に基づく活動が促進されることが望まれる。

●期待される独創的な方法

研究の基本はデータの入手であるが、このための方法としてはプロのように精密巧緻な測定機器や、精選されたアンケート調査などによらずとも、日常生活の中で素人でも簡単に実施できる方法もありうるはずである。そして、このような方法で得られたデータは個々の精度は多少粗くとも、密度の点でプロのそれを凌ぐことは大いに可能であり、それゆえ学問的にも意味のあるものとなりうるはずである。当初よりこのコンクールでは、このような観点からの独創的な、新しい方法論が開発されることが期待されてきた。

各チームともその点ではそれぞれ日常的に実行可能な

方法をいろいろ工夫しているが、まだ既存の学問的方法の適用という方向からの発想がやや目立つようである。逆に、データを得るためにはどうしたらよいかという方向からの自由な発想が望まれる。また、この方向からの発想においてはプロもアマも大差はなく、かえって既成概念にとらわれない分だけアマチュアの方が独創的な方法を考えうるともいえるのではないだろうか。

●第2回コンクールに向けて

データを得るためには…と述べたが、それでは一体何のデータを得たらよいか。問題となる状況がすでにあり、その解決を目指すという場合にはそれに沿ったデータのとり方が考えられる。しかしこのコンクールでは、問題発生以前の身近な環境をじっとみつめる中から、将来の大きな変化の小さな兆を読みとろうということをおねらいとしているのであり、このような場合にはどのデータが有効であるかがなかなか見通せないのである。

従って当然、期待したようなデータが得られないという形で多くのムダが出ることも予想される。しかしムダを承知であえていくつかの可能性に賭けて地道な研究を積み重ねるといふところに、このコンクールが従来の環境研究を越える最大の意義があると考えている。また、研究活動を通じて参加者の関心が身近な環境に向けられていけば、それ自体を一つの大きな成果と考えてもよいのではないだろうか。

今回の中間報告を聞いても、わずか2年間の研究期間で新しい方法論の開発とそれに基づく目ざましい成果を期待することが果して適当であろうかとの反省も出てきたが、次回のコンクールでもやはり、可能性に賭ける、という考え方が重要なのではなかろうか。(久須美記)
中間報告を行う沖縄チーム





功成刊行物紹介① 研究助成 成井裕美子助成

「戦前期日本官僚制の制度・組織・人事」

戦前期官僚制研究会編／秦郁彦著
(財)東京大学出版会刊 B5 770頁18,000円

「不明の点を一つ一つ調べて埋めていくという作業は大変なことですが、新しい発見や思わぬ関連性に出くわす喜びもたくさんありました。例えば昭和16年に初めて女性で高等試験の行政科にパスされた渡辺美恵さんとおっしゃる方がおられまして、その後どういう経歴をたどられたのか分らなかったんですが現在大分大学で先生をしておられることが分かりました。公式の文献にはほとんど出ていないだろうと思うのですが、戦前期の日本の官僚制を知る上で貴重な経歴だと思ひまして第1部の『主要官僚の履歴』に収録しました。1,373人の中の紅一点というわけです。」上梓されて直ちに財団事務局に5冊の著作をお持ちになられた秦先生のお話である。

基礎的文献として可能な限りの「主要官僚の履歴」「主要官職の任免変遷」「高等試験合格者一覧」「制度・組織の解説」を収録したこの著作は、どの頁もどの頁も固有名

詞の連続で一見したところ何の面白味もない。しかしどの頁からでも糸をたどって関連事項を追跡していくと実にさまざまな人間模様が浮び上ってくる。冒頭の著者のお話はそのほんの一端である。そういう意味でこれは非常に人間くさい、素人にとっても飽きることのない読みものでもある。

勿論この著作の真価はそういうところにあるのではなく、戦前期（ここでは昭和22年3月20日以前）官僚制の制度と組織と人事について、緻密な検証を経て事実関係を正確に網羅したという点であろう。調査の対象をいわゆる内地だけでなく朝鮮総督府、台湾総督府、樺太庁、関東庁、南海庁、満州国、蒙古聯合自治政府、さらに国策会社・団体等から南方軍政機構に至るまで掘って精査している点は、特筆に値しよう。なお、著者等はすでに陸海軍の軍事官僚について『日本陸海軍の制度・組織・人事』を東京大学出版会から出されており、今回の著作と姉妹編をなしている。同様の基礎資料が大学や試験研究機関の研究者・科学者についても作成されれば日本の近代科学史の研究を前進させる上で大いに益するのではないかと思われるが試みる人はいないだろうか。(山岡記)

功成刊行物紹介② 助成者による 助成者によるプログラム

「未来を見つめて」

シーブーラパー著、安藤浩訳
井村文化事業社刊(タイ叢書文学編15)A5 314頁1,950円

「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成を受けた本書は、タイ近代文学史上にゆるぎない地位を占める傑作で、古典とも言うべき評価を受けている。

著者シーブーラパーは、タイ近代文学の創始者の一人に数えられ、またタイ言論界の中心人物の一人でもあった。バンコクの官吏の子として、1906年に生まれた著者は、名門ワット・テープシリン中学校から、立憲革命後創設されたタマサート大学の夜間部に学んだ。卒業後は、様々の新聞社で活躍する一方、約30年間の文筆活動を通して多数の長短編小説等を発表している。新聞人として自由と民主主義を掲げ続けた彼は、当局との衝突も多く、1952年には「王国内外反乱」の廉で逮捕され、57年の特赦まで法廷闘争を余儀なくされた。本書はこの時、獄中で執筆されたものである。58年に文化交流使節団長として北京を訪門中、タイでサリット元師によるクーデター

が起こり、中国に亡命。74年に、北京で客死した。

小説は、貴族の子弟が多く通うバンコクの名門中学校（著者の学んだ中学校がモデル）を舞台に、ある貴族の庇護をえて、東北タイの極貧の村からこの学校に通うことになった少年チャンターが、学校で、また貴族の家で出会った様々の人々の姿を通して、立憲革命前後の社会の変化と人々の生き様の移り変りを描いている。“美わしき伝統”と言うところのタイの伝統的階級意識を象徴する貴族の家族、貴族の子弟である級友、校長らと伝統秩序に盲目的に従う使用人仲間の一方で、平民出身で平等・自由といった新しい思潮に目覚めた級友やこれを支援する一部の教師達という新旧の二つの考え方の相克が活写され、立憲革命というタイ社会の大変動の中で、主人公が民主主義の理想に目覚めていく姿が描かれる。

本書は、歴史の大転換期に生きた著者が体験に基づいて綴った歴史書であり、また民主主義の啓蒙書であり、青少年時代を描いた青春小説でもある。小説の時代は戦前ではあるが、描かれたタイ社会の姿は今日なお色濃くその姿をとどめており、それ故に現代のタイの読者の幅広い支持と共感を得ているのであろう。(牧田記)



助成研究報告書のご案内

財団の「成果発表等助成」による研究報告書で下記のものに若干余部があります。ご希望の方はハガキでレポート係までお申し込み下さい。無料でお送りいたします。お申し込み多数の場合は先着順となりますのでご了承下さい。

<交通・環境領域>

- I-006 大気中の重金属微粒子の極表面組成分析による都市大気汚染の新しい評価方法の開発——オージェ電子分光法による表面定量分析——（志水隆一 他 A-4 190頁 データブック 英文）

<社会福祉領域>

- II-006 英国の第一線総合保健サービスにおける医師、保健婦、看護婦の相互協力援助体制の実情に関

トヨタ財団理事 齋藤尚一氏ご逝去

トヨタ財団理事齋藤尚一氏は、去る昭和56年11月30日肝不全のためご逝去されました。

齋藤氏は当財団設立以来の理事として、財団活動に対して適切なるご助言とご指導を給わり、当財団を今日のごとく導いていただきました。今後われわれは齋藤氏のご意志を生かし、財団活動をより一層発展させていく所存であります。

同氏はまた、国産自動車技術の発展に大きな足跡を残し、わが国自動車産業の基礎を築き上げられました。またスポーツ、絵画、写真と幅広いご趣味にあわせ野性味豊かなお人柄は周囲を魅了してやみませんでした。

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

トヨタ財団前監事 大西四郎氏ご逝去

トヨタ財団前監事大西四郎氏は、去る昭和56年12月2日急性肺不全のためご逝去されました。

大西氏は当財団監事として、財団の財産状況および業務執行状況等について適切なるご指導を給わり、財団の財政的基礎を築かれました。また財団事業活動に対しても、幅広いご助言をいただきました。このような同氏のご意志を生かし、財団活動をより一層充実させていきたいと念じております。

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

する調査研究報告書（朝倉新太郎 他 和文B-5 151頁、英文B-5 163頁）

- II-007 高度産業国家の利益政治過程と政策——日本——（高坂正堯 他 B-4 252頁 和文）

<教育文化領域>

- III-009 日本アラブの相互認識に関する研究（前嶋信次 他 B-4 164頁 英文）
 III-010 前近代のアジアにおける陶磁貿易の実態の国際的調査研究—昭和54年度の研究成果（三上次男 他 B-4 96頁 和文）

<特定課題>

- IV-001 ムラづくりの系譜と展望——湯布院地域における地域社会の変化に関する実証的研究（清成忠男 他 B-4 30頁 和文）
 IV-002 下北半島出身者の職業的社会化過程についての再追跡調査研究（細江達郎 他 B-4 64頁 和文）

編集後記

▶今回は堀輝三先生に、成果発表等助成を受けて出席された国際植物学会議の様様をお書きいただきました。お忙しい中を誠にありがとうございます。

▶財団設立以来8回目の正月をむかえました。おかげさまで例年の研究助成も軌道に乗り、事務的な仕事はかなりルーチン化できるようになりました。しかしルーチン化は同時にマンネリズムへの第一歩ともなりかねません。社会を常に若くあらしめるための触媒を自認する財団としてはマンネリズムこそ最大の敵です。本年もまた新たな課題発掘を目指して努力したいと思います。

ご訂正のお願い —— 昨秋発行いたしました全国巡回報告会「街と建物—明治・大正・昭和」報告書中、P・34、左段下から5行および右段上から3行、9行の「大原総一郎」とありますのは「大原孫三郎」の間違いでした。事務局の手違いによりご迷惑をおかけしました。ご訂正お願い申し上げます。

トヨタ財団レポート No.16

発行日 昭和57年1月20日

編集発行 財団法人 トヨタ財団
 （担当 久須美雅昭）

印刷 真友工芸株式会社

このレポートを継続してご希望の方はハガキにて財団レポート係までお申し込み下さい。無料です。